Ⅳ．高校１年生　評価の実際

持山育央

１．評価の４つの柱の観点化

高校１年では、全体に設けられた評価の４つの柱を、学年で「見につけさせたい」と考える力と照らし合わせて、次のように振り分けて考えた。なお、観点の具体的項目については、実地調査報告書を参照。

〔評価の４つの柱〕　〔学年の観点〕

Ⅰ．知的関心の形成と問題解決能力
→→テーマを設定する力・テーマを追究する力

Ⅱ．体験・コミュニケーション能力
→→討論する力

Ⅲ．創造的表現能力
→→研究内容をまとめる（表現する）力

Ⅳ．総合的思考力と実践能力
→→実践する力・自分を評価する力

２．自己評価・相互評価について

２－１　自己評価について

自己評価は、その時点での自分の取り組みを振り返ると共に、それまでの自分の変化や、新たな課題・問題点、他の人からの影響を問う形で行われた。具体的には、１学期末と２学期末に行ったそれぞれの反省、個人テーマ発表会後の報告書、野外学習後に行われた野外学習の報告書、最後に行った総括的なアンケートである。

自己評価のコメント

（【　】内は発表テーマ）

Ａ．自分で評価できる（頑張った）点

・【原子力発電と放射性物質】実際に現地を訪れ、町の様子などを見に行った。自分で実際に放射線の量を毎日観測し、資料を作った。

・【非行少年の心理】テーマは変わっていないが、具体的なテーマを何回か変えたり、いくつか考えたりして、自分が一番研究したいことを中心に研究することができた。

・【点字を知る～視覚障害者】人があまり知らないこと（点字のこと）を、クラスの人に教えられた。自分自身で点字を覚えた。研究が負担にはならず、楽しく進めることができた。障害者を見る目が変わった。この機会が、自分にとってかなりプラスになった。

Ｃ．今後の生活に生かしたいこと

・【犯罪心理学】犯罪だけにとらわれず、もっと広い範囲で人の心をわかってあげられる力をつけていきたい。

・【盲導犬】視覚障害者の方の苦労など（困っていること）も知りました。これから街を歩いている時に、少しでも暖かい目で見てあげれれば良いと思う。

・【地球の持続は可能か】無駄な電気を使用しない。これを機に、もっと知識を深めたい。資源を大切にしたり、リサイクルをやる。

２－２　相互評価について

相互評価は、クラスでの相互評価と、研究グループでの相互評価とに分けることができる。クラスでの相互評価の機会は２度、研究テーマの発表会と研究発表会である。それぞれ、各個人発表についてクラス全員が客観評価（Ａ～Ｃ）を行い、研究発表会ではさらにコメントをつけた。このコメントは、評価を集計した後、それぞれの生徒に渡すことにする。研究グループ内では客観的な相互評価は行っていない。常に話し合いながら行ってきたので、それぞれの評価は、質問や意見として本人に伝わった。

研究発表会のコメント評価紹介

（【　】内は発表テーマ）

・【地球温暖化】参考資料を使ってすごくよい発表だったと思う。難しい問題だと思うけど、私たちが身近なところで気を遣っていけばそう難しいことではないと思った。言い方がとても良かったと思う。（Ａ）

・【犯罪心理学】生まれた時から原因があり、育ち方によっても変わるというのは恐ろしいことだと思う。がんばったって感じがしました。（Ａ）

・【近視について】一部の人の考えが間違っていたことや、根本的な解決法などをきちんと発表できていて良かったと思う。（Ａ）

・【八方美人】…私が今まで生きてきて、ちょっと八方美人ぽいかな？と思った人は、本当の友人として気楽に話せる子だったので……（Ａ）

・【私はお腹に住んでいます】言おうとしていることがちゃんと伝わってきた。発表に意見が入れていてよかった。（Ｂ）

・【各地の食事】…日本の食事が特徴的で良いということがわかった。（Ｂ）

・【青年期について】現在とても重要なことだし、私たちにも関係の深いと思う。（Ｂ）

・【水族館について】自分たちの意見なども入れて発表すると良いと思った。（Ｂ）

・【水族館について】穴だらけ、感想なし。（Ｃ）

・【第二次反抗期】言っていることがよく伝わらなかった。（Ｃ）

3．教師の評価について

教師の評価は、日常的なアドバイスと、5．で述べる学年末の個人評価表の講評である。個人研究を進めてきたため、追究活動の段階では主に面談形式で生徒それぞれに合った方法でアドバイスをしてきた。

学年末の講評では、良かったところを積極的に

4．評価の悩み
学年で話題になったことについて

自己評価の扱いについて…相互評価・教師評価と学年末評定との関係評価の機会の多さについて

5．学年末評定について

学年末評定は、3つの観点「テーマの設定」「追究活動」「研究のまとめ」それぞれの自己評価、相互評価、教科の評価を参考に行う。自己評価は、自己評価アンケートを中心に、相互評価はこれまでに行った2度の評価資料をまとめて、A（充分に満足できる）～C（努力が必要）とした。教師の評価は、これまでの活動を振り返り、それぞれ総合的にA（充分に満足できる）～C（努力が必要）の3段階で評価した。

評価する人と資料

	テーマの設定	追究活動(野外学習などを含む)	研究のまとめ(集録・発表)
自己評価	自分	自分	自分
資料	1学期の反省 自己評価アンケート	2学期の反省 自己評価アンケート	自己評価アンケート
相互評価	クラス		クラス
資料	テーマ発表会の評価		研究発表会の評価 （集録を読んでの評価）
教師評価	指導教官＋担任	指導教官	指導教官＋担任
資料	テーマ発表会の評価	普段の様子の評価	研究発表会の評価(担) 集録原稿の評価(指)

上の表をもとに、学年担任団で話し合い、学年末評定A～Cをつける。その際、相互評価と教師の評価とが客観的な評価と考えて、この2つ（表の下2行）を資料とし、自己評価は参考にことにした。特に自己評価と相互評価、教師評価とのずれについては、講評で説明することにした。

講評では、良かった点を積極的に評価するコメントを書き入れた。

最終的に、生徒には下の「個人評価票」を（総合人間科の通知表として）渡すことになる。

個人評価表

高校1年＿＿＿組＿＿＿番　氏名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

	テーマの設定	追究活動	研究のまとめ	
自己評価				
相互評価				
教師評価			集録	発表会

学年末評定

講評
講評者（　　）

参考、実際に行ってきた評価について

高校１年で、この１年間に行ってきた評価を紹介する。

○研究テーマの発表会（1996年７月６日）

１学期末に行われた研究テーマの発表会では、自己・相互・教師共にＡ～Ｃの３段階の尺度を持って、それぞれに各の研究テーマを評価した。ここでは、あまり具体的な項目は設けず、大まかな評価が行われた。

●自己評価　「自分の発表について自己評価しなさい」
よくできた　Ａ
ふつう　Ｂ
あまりよくなかった　Ｃ

▲相互評価　良い発表だった　Ａ
ふつう　Ｂ
もう少し頑張ってほしい　Ｃ

■教師評価　生徒の相互評価と同じ評価尺度
良い発表だった　Ａ
ふつう　Ｂ
もう少し頑張ってほしい　Ｃ

○野外学習の報告・反省（1996年11月16日）

野外学習の●自己評価を、文章化して行った。
訪問先で聞いた話・わかったこと・新たな課題や問題点・取り組んで自分自身が変わったと思われる点・野外学習に参加した感想を、それぞれ文章化した。

○パネルディスカッション（1996年11月28日）

▲相互評価。それぞれのパネリストに対するコメント、評価（Ａ～Ｃの３段階）をクラス全員が記入する。

○研究発表会（1996年11月28日・1997年２月６日・２月13日・２月15日・２月20日…）

１年間の研究のまとめとして行われた研究発表会では、▲相互評価と■教師の評価とを行った。方法は上記（パネルディスカッション）と同様。

○●自己評価アンケート「１年間の取り組みを振り返って」（1997年２月15日）

Ⅰ．学年で身につけさせたいと考えた力を観点化した項目について、それぞれの取り組みを４段階（充分できた～全くできなかった）で評価させた。内容は１．で述べた通りで、項目数は、「テーマの設定」についてが４（①ａ～ｄ）、「追究活動」についてが９（②ａ～ｅ、③ａ～ｄ）、「研究のまとめ」が12（④ａ～ｄ、⑤ａ～ｄ、⑥ａ～ｄ）である。

Ⅱ．また、次の３点について文章でまとめさせた。

Ａ．自分で評価できる（頑張った）点を述べなさい。

Ｂ．研究をすすめるにあたって、一番困難だったことは何ですか。

Ｃ．自分の研究から、今後の生活に生かしたいことは何ですか。